

「やる気応援奨学金」レポート

印で問題持つ子どもに触れる
受け止める姿勢と環境が大切

法学部法律学科三年 飯島 章太（千葉県立柏中央高校）



はじめに

私はこの度、二〇一三年度後期の「やる気応援奨学金（海外語学研修部門・英語分野）」の御支援により、二〇一四年二月一三日から三月二三日までの約四〇日間、インドへ行ってきました。ここでの日々は今でも忘れることが出来ず、このような形で経験を皆様にお伝えすることが出来て、大変うれしく思っております。稚拙な文章ではありますが、少しでもあの時の経験が伝われば何よりの幸せです。

インドに決めた理由

インドへ留学する人は決まっています。「何でインドなの？」と尋ねられます。私も、「におってきそうだね」や「危なくないの？」「何か着

てるもん全部剥がされそうだね」など、色々な方からお言葉をいただきました。もちろん、何もかもが違うのがインドというイメージは私もありましたが、不安もたくさんありました。それでもインドを留学先に決めたのは、不安よりもわくわくする気持ちが大きかったのだと思います。

私は大学二年の夏から、無料で子どもからの電話を受け、子どもが自分で問題解決出来るように導いていく団体である「せたがやチャイルドライン」にかかわらせていただいています。そこでのボランティアを通して、電話を受ける姿勢や人がつながっていく様子を見て、非常に関心を抱いていました。そして、インドにもユニークな活動をされているチャイルドラ

インドがあるということを知り、ぜひ「日本と全く違う」インドで子どもを受け止める姿勢を学びたいと思い留学を決めました。

活動内容

インドは、児童労働、ストリートチルドレン、性的虐待や受験競争など子どもたちにかかわるさまざまな問題を抱えています。このためさまざまな団体が子どもたちを保護支援しています。ここからは主にインドで訪れた①BOSCO（子どもの一時保護施設を運営するNGO）と②Childline India Foundation（CIF）での経験についてお伝えします。

ボランティアのきっかけ

当初は、インドで子どもにかか

わるボランティアは全く考えていませんでした。その思いが生まれたのは、近所の子どもたちと経験したある事件がきっかけでした。

インドでの最初の一週間、私は近所の子どもたちとサッカーをして遊んでいました。そんなある日公園にいたおじさんが、遊んでいた子どもたちを集め、彼らの頭をグーの手で殴り始めました。私が「なぜ殴っているのか」と聞くと、「この場所は汚い。君はここには来てはならない」と言われてしまいました。別の日にも、おじさんが来て、「こっちこっち」と子どもたちを呼んでいたのです、その理由を聞くと、「警察が呼んでいるんだ」と彼は言いました。「なぜ？」と再度質問してみました。何か言葉を発した後、そのまま歩いていってしまいました。しかし、再びそのおじさんとおじさんを見た時には、ほかの子どもたちに注意などはしていませんでした。

そんな中、ある時偶然話した男の子が「ここは貧しい子は遊べな

い場所なんだよ」と教えてくれました。その時「なぜ貧しい子は遊んではいけないのだろうか」「インドの子どもたちのことをもっと知りたい」と、子どもたちとかかわるボランティアをしたいという思いが強くなりました。

そこでインタビュをしにBOSCOを訪れたところ、「ボランティアしてみる？」とスタッフの方が提案してくださり、その思いを実現することが出来ました。

活動を通して感じたこと

BOSCOは、バンガロール市内に七つの拠点を置き、危機的な状況にいる子どもたちを現地へレスキューに向かい、一時的に保護するNGOです。そこでのボランティアは、そのほとんどが子どもたちとゲームやダンスやサッカーなどをすることだったので、あまり「ボランティア」とは言えないかも知れませんが、ここでの三週間の経験は私に多くのことを教えてくれました。

子どもを信じること

一緒に遊んでくれた子どもたちは、ほとんどが遊び盛りの小学生中学生でした。彼らは初日から私

サッカーを中断し近所の子どもたちと共に



に「Dance! Dance!」と迫り、最初はたまげたものでしたが、楽しく普通にダンスをする彼らの様子は、普通の家庭にいる子どもたちと変わりないように見えました。

ですが、時々子どもたちの様子が変わることがあります。遊具の取り合いなどのけんかでは手加減なく殴り合い、時間が夕方頃になりスタッフが家に帰る姿を見て、「このドアを開けて」「俺には家が不要なんだ。帰りたい」と訴えてくる子もいます。また、急に無言になった後に、声を押し殺して泣

いている子もいました。その時改めて、この子たちは難しい環境や家庭の中で、いつも不安を抱えながら暮らしているんだな、と考えさせられました。

それでも彼らは、自分の不安を抑え、自分たちで問題を解決します。けんかがあれば、ほかの子どもが間に入り、誰かが泣いている時には、誰かがそばに行つて、慰めようとします。

そんな子どもたちを見ている間、私はチャイルドラインで学んだことを思い返していました。大人が無理に助言をしなくても、子どもたちは自分で問題を解決する力を持っている。だから、子どもを信じてその声を聴くことに徹することが大切。このことは、子どもにかかわる人みんなに言えることなのだろうと、その時気付きました。

そこで、今自分が彼らに出来ることは何だろうかと考えましたが、結局何も出来ないという自分に気付いただけでした。だから私が出来たのは、一期一会を大切に、なるべく多くの子どもたちと遊び、彼らとの思い出を作っただけです。そのことが彼らにとっても、「珍しい」日本人と遊んだという思い出になってくれたらこれ以上うれ

いことはないです。

CIFでの活動

四週間バンガロールで過ごした後、ムンバイという都市に向かいました。そしてホーリーという祭りを楽しんだ後、CIFというNGOの本社を訪問しました。

ここではスタッフの方が私のために、五日間の濃密なプランを作つてくださり、各課の説明や、コールセンターへの訪問、小学校での性的暴力に関する授業の見学など多くの経験をさせていただきました。ここではその中でも、子どもの声を聴く姿勢に関する部分を取り上げたいと思います。

CIFと日本の相違点と共通点

人口一二億人の三九%を占めているインドの子どもたちは、多くの問題を抱えており、緊急に救助が求められることも少なくありません。CIFには、年間三〇〇万もの電話が掛けられ、そのため電話の迅速な処理が求められています。そこで目を引いたのは、IT技術を利用しながら、平均四五秒で電話の処理をしていたことでした。

というのも、日本では、通話時

間が一〇分を超えることは珍しくなく、何げない会話を交わしながら、その中で彼らの悩みをぼつぼつと受け止めていくことを大切にしていたからです。

このように比較して、緊急性のある電話を受け取ることの必要性を感じると共に、緊急性が表れていないものの、心の中でもやややがたまり潜在的に緊急性を持った子どもたちの声を受け取ることも重要であるのだと改めて気付き、

こうして国によって電話が果たす役割というものが違うのだと気付くことが出来ました。

一方共通するものにも気付きました。C I Fのコールセンター長のお話の中で「すべての電話が私たちにとって重要なんです。いたずら電話でも、無言電話でも、彼らはそれでレスキューが必要だというサインを示しているかも知れないのです」という言葉がありました。このような姿勢は日本でも



C I Fのスタッフの方へのプレゼンテーション後に

語られています。長年日本のチャイルドラインにかかわっている方も「電話は、いたずら電話とか、無言電話が多いから、結構疲れるよ。でも、そういう電話を受けることもチャイルドラインの大事な仕事。子どもはそういう電話をすることで、ストレスを減らして、自分で問題を解決することもあるかも知れないんだから」とおっしゃっていました。

は、子どもとかわる人に共通して大切なだろうと、お二人の言葉から気付かされました。

インドでの最終日

C I Fのスタッフの方は、色々な活動や施設の案内のほか、食事や観光にも連れて行ってくださるなど、私に厚い「おもてなし」をしてくださいました。「はるばる日本から来たんだから、そのお礼」とおっしゃいましたが、私は何もお礼に返すことが出来ずに、少しやりきれなさの後悔が残っていました。

そんな中、最終日の帰りの車で、私はふとこんなことを話しました。「実は一昨日、スタッフの方とお話をした際にこんなことを言ってくださいました。『私たちの活動すべては子どもにつながっているんですよ。こうやって君を色々な場所へ連れて行って、私たちが知ってもらうことも子どもを守る環境作りにつながっていくんです』と……」。

こうして話をしていくうちに、「ああ、これで最後なんだな」と実感し、近所の子とやったサッカー、B O S C Oでの出会い、そしてC I Fの厚いおもてなし……色

々な思い出があふれ出て、感極まって、次の言葉が出ないでいました。そんな様子を見たスタッフのNishiは最後に私にこう言いました。

「もし子どもが安全に生活を送れるなら、その国は安全な国だ」
おわりに

こうしてインドでは数えきれないほどの経験をする事が出来ました。そして、その裏には多くの方々の親切と犠牲がありました。多くの方々の、寛容さ、優しさ、注意、厳しさ、苦勞そして協力がなければ、これほど多くのことは実現出来ませんでした。

もちろん、良いことばかりではなく、財布を落とし、だまされ、腹を下し、反省することもたくさんありました。それでも、それを含めたこの経験が私の人生の基盤になったことは確かです。これらの経験、反省を生かして、私の家庭裁判所の調査官になるといえるか遠い夢に、少しでも近付けたらと思っています。私の活動を支えていただいた多くの方に感謝を申し上げます。報告を終えたいと思います。本当に、ありがとうございます。